

# ポスト国民国家へと移行する社会を読み解く

## 次世代カリキュラムの開発研究 (I)

一言説を構成原理とする高校地理歴史科世界史の場合―

宮本 英征 池野 範男 伊藤 直哉 草原 和博  
藤原 隆範 湯浅 清治

### 1. はじめに

知識基盤社会化やグローバル化している知識基盤社会において、社会問題は世界史カリキュラムの主要単元でこそ扱うべき教材であろう。例えば、ポスト国民国家へと移行するグローバル社会を研究対象にしている社会学者のウルリッヒ・ベック<sup>1)</sup>は、近代社会と現代社会について次のように論述している。すなわち、近代社会では個人が伝統や共同体から解放され自由になったが、それ故に基盤を持たず不安感をもった個人は制度化され一定の枠組みに適合するように個人化が進行したとする。一方で近代社会を反省して成立した(しつつある)現代社会では、個人が社会や制度から自律し多様な経路をもつ個人化が進行しているという。そして個人が直面する社会問題の質的な変化にもベックは言及する。近代社会における個人が直面する社会問題というものは、国民国家や政党政治、科学的専門家、福祉国家、学校、家族など近代化が生み出した諸制度に関する問題であった。個人は、このような問題を本来の近代化を進めることが不十分なため発生していると分析した。また、個人は、近代化が生み出した国民国家や福祉国家などの諸制度を補完すれば、これらの社会問題を解決できると考えている。しかし、現代社会において、自律し多様な個人として自由を勝ち取った(と考えている)個人の出現は、グローバル化やシステム化の進行もあって、近代社会が創りだした国民国家や福祉国家を解体させ、社会問題に直面した個人への支援や保護を弱体化させた。そして、個人を社会問題にさらけただけではなく、これまでは予測し解決できると考えていた社会問題ではなく、思いもよらない予測不能である社会問題の危険(リスク)に個人を直面させる。

このような危険(リスク)社会において、ベックは自律した個人を前提とし、多様性をもつ個人が社会問題に対して主体的に思考判断することが一層重要であると考えている。しかし、実際の個人は、動物化やマクドナルド化などと称される社会環境によって表面的な感情や心理を操作する影響を受けやすくなっている。そして、他者、特に権力者は個人を傷つけず、また管理していることも自覚させずコントロールする。個人は自分や他者の内面の価値観や思考を配慮せず、他者に依存・同化させられている。社会問題への対応も他者(権力者)が望むものとなっており、画一的な社会を形成しやすくなっている。

以上のようなベックの論理と現状に基づく、グローバル化した世界で生きることを要求されている次世代の生徒は、社会問題の解決の困難性や新しい社会問題の出現に直面していることを自覚する必要がある。また、社会問題への対応が、他者に誘導され閉ざされていることを反省することが重要である。社会問題の解決を主体的に思考し判断するために、生徒自身が他者による影響や操作を理解するとともに、自分の思考や判断を反省し、自身や他者の価値観やその価値観に結びつく権力作用などとともに、より内面に対する認識を深化させる必要性に迫られている。

このことから、社会を認識させ市民的資質を育成することを役割とする社会系教科は、社会問題とその解決方法を他者によって創られたものとして扱う。そして、他者の思考に共感し無意識・無批判に受容する生徒自身を反省させ、主体的に思考・判断する資質を育成しなければならない。また特に、社会問題が近代社会において形成された問題であるならば、歴史教育においてこそ、教育内容や教育目標の主題に社会問題と

その解決方法を学習することを取り上げ、単元を組織しなければならない。

すでに歴史教育とその研究では、社会問題を言説と認識させ、社会問題を創り出している価値対立の構造を明らかにすることで、生徒自身が社会問題を反省し社会問題の認識を深める単元が開発されている<sup>2)</sup>。

そこでこれまでの先行研究を発展させ、本研究では、社会問題を言説として認識させる高校地理歴史科世界史の次世代カリキュラムの開発を行い、生徒がポスト国民国家に移行する社会を読み解くことを可能にしたい。次世代カリキュラムは近代化にもとづく従来の「国民」意識を中心とする国家の形成が不可能となる中で、新しい「国民」意識にもとづく国家のあり方を追究する。そうすることで国家や社会に対して批判的に行動する資質を育成し、他の人々と共同・連帯することで市民社会を形成していく方法を認識させる構成になるように試みた。

## 2. 高校地理歴史科世界史の次世代カリキュラムの開発

高校地理歴史科世界史の次世代カリキュラムとして開発したものを示しているのが表1である。カリキュラムは導入単元「言説『帝国』を考える」<sup>3)</sup>、単元1「言説『国民国家』を考える」<sup>4)</sup>、単元2「言説『宗教』を考える」<sup>5)</sup>、単元3「言説『福祉国家』を考える」<sup>6)</sup>、終結単元「言説『平和』を考える」<sup>7)</sup>の5単元で構成する。

導入単元は小単元1「『帝国』とは何か」、小単元2「ローマ帝国時代の帝国」、小単元3「大航海時代の帝国」、小単元4「帝国主義時代の帝国」、小単元5「帝国を考える」の5つの小単元で構成する。単元の主要な教材はローマ帝国の皇帝が権力を表象するために創った建造物、インカ帝国をヨーロッパに紹介したスペイン宣教師の記録文書、大英帝国・フランス植民地帝国・大日本帝国の植民地との関係をイメージさせる博覧会の展示を選択し、言語「帝国」の使用法を構築できるように配列している。その学習内容は、帝国は、皇帝が支配した広大な国家やローマ帝国に匹敵するほど優れた国家、植民地支配を強調する強い国家を意味するようになるという歴史的認識を構築させる。そして、帝国という言葉は国家の支配力や豊かさなど国家のあり様を説明する多様な意味をもつ言葉であるという社会的認識を構築させ。さらに、現在では言語「帝国」は、アップルなど国家以外のグローバル企業にも使用されるという社会的認識へ再構築させるものとなっている。

このことから、導入単元の教育内容は、「帝国」は、皇帝が支配する広大な国家、ローマ帝国に匹敵する豊

かな国家、植民地支配を強調する国家などを意味するようになったという歴史的認識に基づいて、私達は「帝国」に多様な歴史的イメージを結びつけ、国家の支配力や豊かさなど国家のあり様を説明するために使用しているという社会的認識を構築し、自身の言語使用を反省する。そして、歴史的なイメージに基づかない国家以外の企業や組織の支配力や豊かさを説明する多様な意味をもつ言葉であるという社会的認識へ再構築させるものとなる。つまり、教育内容は、現代社会の構築性を認識するために、現代社会を説明する言語とその使用法を区別し、言語使用についての歴史的認識を社会的認識へと再構築する方法を認識させることで、グローバル化に直面する国家・社会を言説として読み解くカリキュラム全体の視点を形成することを目標にしている。

単元1「言説『国民国家』を考える」は小単元1「『国民国家』とは何か」、小単元2「イスラエル共和国に基づく国民国家」、小単元3「アメリカ合衆国に基づく国民国家」、小単元4「国民国家を考える」の4つの小単元で構成する。単元はイスラエル共和国の独立宣言やキング牧師の演説を主要な教材として選択し、言葉「国民国家」の使用法を反省し、国民国家が民族問題を創り出し、またその問題に対応した言葉として新たに構築できるように配列している。その学習内容は、国民国家は歴史的な指導者の考え方に基づいて、文化的に閉ざされた国民や多文化主義を尊重する国民を創り出すことによって成立する国家であるという歴史的認識を構築させる。そして、私達は「国民国家」を国民に多様な文化を認める、認めないという歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的認識を構築させる。最後に、この歴史的な考えに基づく国民国家が民族問題の原因であることから、開かれた国民国家を形成するために、「国民国家」の新しい使用法を生徒に考えさせるというものになっている。

このことから、単元1の教育内容は、「国民国家」の使用法についての歴史的認識に基づき、私達は「国民国家」に多様な歴史的な考え方が結びけて使用しているという社会的認識を構築し自身の言語使用を反省する。そして、言語「国民国家」が創り出した民族問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「国民国家」の新しい使用法を生徒が追究するという社会的認識へ再構築するものになっている。つまり、教育内容は社会問題の原因の構築性を認識するために、社会問題の原因を説明する言語を言語とその使用法に区別し、言語使用についての歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み

表1 高校地理歴史科世界史の次世代カリキュラムの構成

単元	小単元	小単元の主要な学習内容	単元の教育内容	カリキュラムの目標
導入単元：言説「帝国」を考える	1 「帝国」とは何か	中学校の歴史授業で学習したローマ帝国やインカ帝国、大日本帝国など「帝国」の名称と結びついた国家のイメージや現代世界で「帝国」と称され国家のイメージなどを生徒に考えさせながら、生徒自身も持っている「帝国」のイメージを自覚させる。	「帝国」の使用法についての歴史的認識に基づいて、私達は「帝国」に多様な歴史的イメージを結びつけ、国家の支配力や豊かさなど国家を説明するために使用しているという社会的認識を構築し、自身の言語使用を反省する。そして、歴史的なイメージに基づかない国家以外の企業や組織の支配力や豊かさを説明する多様な意味をもつ言葉であるという社会的認識へ再構築する。	現代社会の構築性を認識するために、現代社会を説明する言語とその使用法を区別し、言語使用についての歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国家・社会を言説として読み解く視点を形成する。
	2 ローマ帝国時代の帝国	コロッセウムや凱旋門などを建設するなどローマ皇帝の権力が強く地中海周辺を支配した広大で文明が高いなどのローマ帝国についての当時の人々のイメージを理解させる。そして、ローマ帝国時代の帝国は、皇帝に支配が及ぶ広大で文明の高い国家を意味するものであったという歴史的認識を構築させる。		
	3 大航海時代の帝国	ローマ帝国に匹敵するほどの政治を行う豊かで優れた国家である、というインカ帝国についてのスペイン人宣教師のイメージを理解させる。そして、大航海時代の帝国は、皇帝が支配した広大な国家とローマ帝国に匹敵するほど優れた豊かな国家を意味するようになるという歴史的認識を構築させる。		
	4 帝国主義時代の帝国	植民地支配を強調する強い国家という、帝国主義時代の人々のイメージを理解させる。そして、帝国主義時代の帝国は、皇帝が支配した広大な国家やローマ帝国に匹敵するほど優れた国家、植民地支配を強調する強い国家を意味するようになるという歴史的認識を構築させる。そして、帝国という言葉は、国家の支配力や豊かさなど国家のあり様を説明する多様な意味をもつ言葉であるという社会的認識を構築させる。		
	5 帝国を考える	100万人以上の人々がアップルやその下請けで働き生計を立てていることなどを事例にして、現代社会では国家よりも影響力がある多国籍企業を帝国と説明するようになっていくことを理解させる。そして、帝国は国家だけでなく、企業の支配力や豊かさを説明するなど意味や使い方が変化しているという社会的認識にさらに構築させる。		
1：言説「国民国家」を考える	1 「国民国家」とは何か	日本国民と言われた場合、どのような文化や習慣を思い出すかを確認させる。また、アメリカ国民と言われた場合はどのような文化や習慣を思い浮かべるかも確認させる。そして、生徒自身も持っている「国民国家」のイメージを自覚させる。	「国民国家」の使用法についての歴史的認識に基づき、私達は「国民国家」に多様な歴史的な考え方が結びつけて使用しているという社会的認識を構築し自身の言語使用を反省する。そして、言語「国民国家」が創り出した民族問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「国民国家」の新しい使用法を生徒が追究するという社会的認識へ再構築する。	社会問題の原因を説明する言語とその使用法に区別し、その言語使用についての歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を認識させることで、グローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法を獲得する。
	2 イスラエル共和国に基づく国民国家	ベングリオンなどの指導者が発表したイスラエル独立宣言によってイスラエル共和国が成立したことを確認させる。次に、ベングリオンらによる独立宣言とイスラエル共和国の成立は、一元的なアイデンティティと単一な文化意識を持つイスラエル国民を創り出そうという目的があったことを解釈させる。そしてその目的の背景には、イスラエル共和国を文化的に閉ざされた国民によって形成したいというベングリオンらの考えがあることを分析する。最後に、イスラエル共和国は、文化的に閉ざされた国民によって形成したいというベングリオンらの考えに基づく国民国家であり、パレスチナ問題という民族問題を引き起こしたという歴史的認識を構築する。		
	3 アメリカ合衆国に基づく国民国家	1960年代にアメリカ合衆国のキング牧師の演説によって公民権法が成立したことを確認させる。次に、キング牧師の演説と公民権法の成立は、民族問題を解決するために、一元的なアイデンティティを維持しつつ、多様な文化意識を尊重するアメリカ国民を創り出したいという目的があったことを解釈させる。そしてその目的の背景には、民族問題を解決するために、多文化主義を尊重する国民によってアメリカ合衆国を変化させたいというキング牧師の考えがあることを分析させる。アメリカ合衆国は、民族問題を解決するために、多文化主義を尊重する国民を創りたいという歴史的指導者の考えに基づく国民国家であり、文化戦争という民族問題に直面しているという歴史的認識を構築する。最後に、国民国家は、歴史的な指導者の考えに基づき創られる国家であるという歴史的認識を構築する。そして、私達は「国民国家」を国民に多様な文化を認める、認めないという歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的認識を構築させる。		
	4 国民国家を考える。	これまで学習した歴史的な考え方に基づく二つのタイプの国民国家は、民族問題を創り出した一方で、民族問題を解決しようとしたが、うまく機能していないことを説明する。そして、ヨーロッパ連合にみることができる民族意識・国民意識・ヨーロッパ市民意識の形成についての事例		

		から、アイデンティティが多分化された開かれた国民国家の可能性が模索されていることを解釈させる。最後に、開かれた国民国家を形成するために、歴史的な考え方に基づかない「国民国家」の新しい使用法を生徒に考えさせる。		
2：言説「宗教」を考える	1「宗教ナショナリズム」とは何か	世界の主要な宗教の特質や布教地域などを確認し、靖国問題などの国家と宗教の問題に対して生徒の意見を求める。そして、生徒自身も持っている「宗教ナショナリズム」のイメージを自覚させる。	「宗教」の言語使用についての歴史的認識に基づいて、「宗教」は様々な歴史的権力者のナショナリズム化という考えに基づいて使用される場合があるという社会的認識を構築させ、自身の言語使用を反省させる。そして、宗教ナショナリズム問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「宗教」の新しい使用法を生徒に追究させるという社会的認識へ再構築する。	社会問題の構築性を認識するために、社会問題を説明する言語とその使用法に区別し、歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法を獲得する。
	2イランにおけるイスラーム教	イラン・イスラーム共和国のホメイニ氏の言葉によって、成立したイラン憲法でイスラーム教シーア派がイランの国教となったことを確認させる。そして、イスラーム教シーア派の国教化は、一元的な宗教的帰属意識と均一な宗教的統合意識を形成させるようとする目的があったことを理解させる。次に、その目的の背景には、成立したイラン・イスラーム共和国を確立させようとするホメイニ氏の考えがあることを分析させる。最後に、イラン・イスラーム共和国のイスラーム教は、イラン・イスラーム共和国を確立させようとする歴史的権力者の考えに基づく宗教であり、イスラーム教シーア派以外の宗教が排除される宗教ナショナリズム問題に直面したという歴史的認識を構築させる。		
	3アメリカのユダヤ・キリスト教的宗教	宗教排除問題を解決するために、アメリカ合衆国が独立戦争後に信仰の自由を憲法などで保障したことを確認させる。一方で、南北戦争の時のリンカーンの演説や同時多発テロの際のブッシュ大統領の演説により、ユダヤ・キリスト教的宗教への信仰が人々のあいだに広がったことを理解させる。そして、大統領の演説によるユダヤ・キリスト教的宗教の信仰の拡大は、宗教的帰属意識を自由化する一方で、均一な宗教的統合意識を形成させようとする歴代の大統領の目的があったことを解釈させる。そしてその目的の背景には、危機に直面する合衆国を維持するためにアメリカ市民による結束を強化しようとする歴代の大統領の考えがあることを分析する。次に、アメリカのユダヤ・キリスト教的宗教はアメリカ合衆国を維持するためにアメリカ市民の団結を強化しようとする歴史的権力者の考えに基づく宗教であり、ユダヤ・キリスト教的宗教に同化を強制する宗教問題に直面したという歴史的認識を構築する。最後に、宗教は歴史的権力者の考えに基づき信仰される場合もあり、国民や市民をナショナリズム化しようとする意図から、多様な性質をもつように創られる場合があるという歴史的認識を構築させる。そして、私達は「宗教」にナショナリズムという歴史的な考え方を結びつけて使用する場合があるという社会的認識を構築させる。		
	4宗教を考える	これまで学習した宗教ナショナリズムという歴史的な考え方に基づく宗教が、宗教排除問題や宗教同化問題の原因であることを確認する。そして、宗教ナショナリズム問題を解決しようとするドイツの宗教的帰属意識の多分化と宗教的統合意識の多分化に基づく多元的宗教の可能性を事例にして、新しい宗教と国家・市民との関係が模索されていることを理解させる。最後に、多元的宗教を形成するため、歴史的な考えに基づかない「宗教」の新しい使用法を生徒に考えさせる。		
3：言説「福祉国家」を考える	1「福祉国家」とはどのような国家か	軍国主義的なイメージが強いドイツ帝国を、福祉国家として説明する研究者がいることを説明し、福祉国家に興味をもたせる。そして、生徒自身も持っている「福祉国家」のイメージを自覚させる。	「福祉国家」の言語使用についての歴史的認識に基づき、「福祉国家」には労働問題の解決のために、多様な歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的認識を構築させ、自身の言語使用を反省させる。そして、労働問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「福祉国家」	社会問題への対応の構築性を認識するために、社会問題を説明する言語とその使用法に区別し、歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国
	2ドイツ帝国に基づく福祉国家	皇帝ヴィルヘルム1世の言葉を受けた宰相ビスマルクの社会政策は、①工業化による労働問題を解決したい、②貧しい労働者が働かなくても生活できるように援助したい、③育児や介護は家族（女性）に負担してもらいたいという目的があったことを理解させる。そしてその目的の背景には、工業化による労働問題の解決には国家だけでなく家族も中心となるべきだという皇帝ヴィルヘルム1世や宰相ビスマルクの考えがあることを分析させる。最後に、ドイツ帝国は工業化による労働問題には国家だけでなく家族も中心となるべきだという歴史的権力者の考え方に基づく福祉国家であるという歴史的認識を構築させる。		
	3アメリカ合衆国に基づく福祉国家	フランクリン＝ローズヴェルトの演説により制定された社会保障法は、①工業化による労働問題を解決したい、②貧しい労働者には生活のために、企業でできるだけ働けるように援助したい、③育児や介護は家族（女性）に負担してもらいたいという目的があったことを理解させる。そして、その目的の背景には、工業化による労働問題の解決には企業が中心となるべきだというローズヴェルトの考えがあることを分析させる。最後に、アメリカ合衆国は、工業化による労働問題の解決には企業が中心となるべきだという歴史的権力者の考え方に基づく福祉国家であるという歴史的認識を構築させる。		

	<p>4 スウェーデン王国に基づく福祉国家</p> <p>ハンソン首相の演説を受けたメッレル社会大臣が行った社会福祉政策は、①脱工業化による労働問題を解決したい、②全ての労働者が働かなくても生活できるように援助したい、③育児や介護から家族（女性）が自由になるように援助したいという目的があったことを理解させる。そして、その目的の背景には、脱工業化による労働問題の解決には国家が中心となるべきだというハンソン首相やメッレル社会大臣の考えがあったことを分析させる。次に、スウェーデン王国は、脱工業化による労働問題には国家が中心となるべきだという歴史的権力者の考え方に基づく福祉国家であるという歴史的認識を構築させる。最後に、福祉国家は、歴史的権力者の考え方に基づく国家であり、家族・企業・国家など政策の主体を何にするかで、多様に創られてきたものであるという歴史的認識を構築させる。そして、私達は「福祉国家」に、労働問題の解決のために、家族・企業・国家それぞれを重視する歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的な認識を構築させる。</p>		<p>の新しい使用法を生徒それぞれに追究させるという社会的認識へ再構築する。</p>	<p>民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法を獲得する。</p>
	<p>5 福祉国家を考える</p> <p>これまで学習した歴史的な考え方に基づく三つのタイプの福祉国家は現在うまく機能していないことを説明する。そして、日本の限定正社員の創設の政策などから①貧しい労働者には生活のために、企業でできるだけ働けるように援助しつつ、②育児や介護から家族（女性）が自由になるように援助する歴史的な考え方に基づかない新しいタイプの福祉国家が模索されていることを理解させる。そのため、歴史的な価値観に基づかない新しい「福祉国家」の使用法を生徒に考えさせる。</p>			
<p>終結単元：言説「平和」を考える</p>	<p>1 平和塔と凱旋碑</p> <p>広島市にある平和塔が以前は凱旋碑であったことを説明し、太平洋戦争後に凱旋碑が平和塔に変化した理由を考えさせる。</p> <p>2 日露戦争の凱旋門</p> <p>広島市の平和塔の変化を考えるために、日露戦争時に建てられた凱旋門を調べさせる。特に、凱旋門には、明治政府が「凱旋」という言葉により英雄的なイメージを強調する目的があったことを理解させる。そして、この目的の背景には明治政府が日露戦争を肯定的に人々に記憶させ、人々を戦争に動員しようとする考えがあったことを分析させる。最後に、日露戦争の凱旋門の文字「凱旋」は、戦争を肯定的に記憶させ人々を戦争に動員しようとする歴史的権力者の考えに基づいて刻まれたという歴史的認識を構築させる。</p> <p>3 第一次世界大戦の無名戦士の墓</p> <p>広島市の平和塔の変化を考えるために、第一次世界大戦後に建てられたフランスの無名戦士の墓を調べさせる。特に、一見追悼的である無名戦士の墓は、フランス政府が「名誉ある戦死」という言葉を刻むことで、英雄的なイメージを想起するものへ転換する目的があったことを理解させる。そして、この目的の背景にはフランス政府が第一次世界大戦を肯定的に人々に記憶させ、人々を戦争に動員しようとする考えがあったことを分析させる。最後に、フランスの無名戦士の墓の文字「名誉の戦死」は、戦争を肯定的に記憶させ人々を戦争に動員しようとする歴史的権力者の考えに基づいて刻まれたという歴史的認識を構築させる。</p> <p>4 ベトナム戦没者記念碑と3人の兵士像</p> <p>広島市の平和塔の変化を考えるために、ベトナム戦争後に建てられたベトナム戦没者記念碑と3人の兵士像を調べさせる。特に、一般の市民が建設を望んだベトナム戦没者記念碑には、戦死した人名のみが刻まれたことから、追悼的なイメージを想起する目的があったことを理解する。また、アメリカ政府の支援により建設された3人の兵士像は英雄的なイメージを想起する目的があったことを理解する。そして、一般市民はベトナム戦争を肯定的に記憶させようとする政府に対し、戦争を否定的に記憶させ、政府が人々を戦争に動員することを抑えようという考えがあったことを分析させる。また、ベトナム戦没者記念碑の戦死者の氏名は、戦争を否定的に記憶させ平和を築きたい市民の考えに基づいて刻まれたという歴史的認識を構築させる。最後に、「凱旋」「名誉の戦死」などの言葉を権力者が戦争記念碑に使用すると、戦争を肯定的に記憶させ人々を戦争に動員しようという考え方を強調する。一方で、「平和」などの言葉を市民が戦争記念碑に使用することで、戦争を否定的に記憶させ戦争に反対する考え方を強調することができるという社会的認識を構築させる。</p> <p>5 平和を考える</p> <p>広島市の凱旋碑が平和塔に変化した理由を再度考えさせる。そして、平和を実現する言葉やその使用法を生徒に考えさせる。</p>	<p>戦争記念碑に刻まれた文字の使用法についての歴史的認識に基づいて、歴史的な考え方を結びつけた戦争記念碑の文字によって、私達が戦争を肯定的にも否定的にも記憶させられているという社会的認識を構築し、自身の言語使用を反省する。そして、戦争を否定的に記憶し、戦争を反対するための言語とその使用法を生徒それぞれが追究するという社会的認識を再構築する。</p>	<p>市民として生徒が社会問題への対応を実践するために、歴史的認識を社会的認識に再構築し、言語やその使用法への関わり方などの方法を学習させることで、グローバル化した社会に対応する市民社会形成の方法を追求する。</p>	

解く方法を獲得することを目標としている。

単元2「言説『宗教』を考える」は、小単元1「『宗教』とは何か」、小単元2「イランにおけるイスラム教」、小単元3「アメリカのユダヤ・キリスト教的宗教」、小単元4「宗教を考える」の4つの小単元で構成する。単元は、イラン革命の指導者ホメイニ氏の統治論とイラン・イスラーム憲法におけるイスラーム教シーア派の国教条項、アメリカ大統領リンカーンとブッシュ大統領の演説とユダヤ・キリスト教的宗教の形成を主要教材として選択し、言語「宗教」の使用法を反省し、宗教という言葉が宗教ナショナリズムの問題を創り出し、また、その問題に対応しようとした言語として新たに再構築できるように配列している。その学習内容は、宗教は多様な歴史的権力者の考えに基づき、国民や市民をナショナリズム化する性質をもつように創られる場合があるという歴史的認識を構築させる。そして、私達は「宗教」にナショナリズムという歴史的な考え方を結びつけて使用する場合があるという社会的認識を構築させる。最後に、歴史的な考え方に基づいて使用される宗教が、宗教ナショナリズム問題の原因であることから、歴史的価値に結びつかない多元的宗教を形成するために、言語「宗教」の新しい使用法を生徒に考えさせるものとなる。

このことから、単元2の教育内容は、「宗教」の言語使用についての歴史的認識に基づいて、「宗教」は様々な歴史的権力者のナショナリズム化という考えに基づいて使用される場合があるという社会的認識を構築させ、自身の言語使用を反省させる。そして、宗教ナショナリズム問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「宗教」の新しい使用法を生徒に追究させるという社会的認識へ再構築するものとなる。つまり、教育内容は社会問題の構築性を認識するために、社会問題を説明する言語を言語とその使用法に区別し、歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法を獲得することを目標としている。

単元3「言説『福祉国家』を考える」は、小単元1「『福祉国家』とはどのような国家か」、小単元2「ドイツ帝国に基づく福祉国家」、小単元3「アメリカ合衆国に基づく福祉国家」、小単元4「スウェーデン王国に基づく福祉国家」、小単元5「福祉国家を考える」で構成する。単元はドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の演説とビスマルクの社会保険、アメリカ大統領フランクリン＝ローズヴェルトの演説と社会保障法、スウェーデン首相ハンソンと社会福祉政策を主要な教材として選択し、言葉「福祉国家」の使用法を反省し労働問題に

対応しようとした言葉として新たに構築できるように配列している。その学習内容は、福祉国家は歴史的権力者の考え方に基づき、家族・企業・国家など政策の主体を何にするかで、多様に創られてきたものであるという歴史的認識を構築させる。そして、私達は「福祉国家」に、労働問題の解決のために、家族・企業・国家それぞれを重視する歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的認識を構築させる。この歴史的な考え方に基づく福祉国家は、現在うまく機能していないので、①貧しい労働者には生活のために、企業でできるだけ働けるように、②育児や介護から家族（女性）が自由になるように援助する新しいタイプの福祉国家が模索されている。そのため、歴史的な価値観に基づかない「福祉国家」の新しい使用法を生徒に考えさせるというものになっている。

このことから単元3の教育内容は、「福祉国家」の言語使用についての歴史的認識に基づき、「福祉国家」には労働問題の解決のために、多様な歴史的な考え方を結びつけて使用しているという社会的認識を構築させ、自身の言語使用を反省させる。そして、労働問題を解決するために、歴史的な価値観に基づかない「福祉国家」の新しい使用法を生徒それぞれに追究させるという社会的認識へ再構築するものとなる。つまり、教育内容は社会問題への対応の構築性を認識するために、社会問題を説明する言語を言語とその使用法に区別し、歴史的認識を社会的認識へ再構築する方法を学習させることで、グローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法を獲得することを目標としている。

終結単元「言説『平和』を考える」は、小単元1「平和塔と凱旋碑」、小単元2「日露戦争の凱旋門」、小単元3「第一次世界大戦の無名戦士の墓」、小単元4「ベトナム戦没者記念碑と3人の兵士像」、小単元5「平和を考える」の5つの小単元で構成する。単元は広島市の平和塔（日清戦争凱旋碑）、日露戦争時に建てられた東京新橋の凱旋門、第一次世界大戦後にフランスの凱旋門下に造られた無名戦士の墓、ベトナム戦争後に併設されたベトナム戦没者記念碑と3人の兵士像を主要な教材として選択し、戦争記念碑に刻まれた「平和」「凱旋」「名誉の戦死」などの言語の使用法を反省し、言語と戦争記念碑の関係や私達の戦争に対する記憶形成の関係などを新たに構築できるように配列している。その学習内容は、「凱旋」「名誉の戦死」などの言語が、戦争を肯定的に記憶させ人々を戦争に動員したい歴史的権力者によって、戦争記念碑に使用される場合や、戦争に反対する市民が「平和」などの言語を戦争記念碑に使用し、戦争を否定的に記憶させようとす

る場合があったという歴史的認識を構築する。そして、私達は、戦争記念碑の様々な歴史的権力者の言語によって、戦争を肯定的にもあるいは否定的にも記憶させられてきたという社会的認識を構築させる。そして、広島市の凱旋碑が平和塔に変化した理由や平和を実現する言葉やその使用法を生徒に考えさせるものになる。

このことから、終結単元の教育内容は、戦争記念碑に刻まれた文字の使用法についての歴史的認識に基づいて、歴史的な考え方を結びつけた戦争記念碑の文字によって、私達が戦争を肯定的にも否定的にも記憶させられているという社会的認識を構築し、自身の言語使用を反省する。そして、戦争を否定的に記憶し、戦争を反対するための言語とその使用法を生徒それぞれが追究するという社会的認識を再構築するものになっている。つまり、教育内容は、市民として生徒が社会問題への対応を実践するために、歴史的認識を社会的認識に再構築し、言語やその使用法への関わり方などの方法を学習させることで、グローバル化した社会に対応する市民社会形成の方法を追究することを目標としている。

この結果、本カリキュラムの目標は、帝国、国民国家、宗教、福祉国家、平和などグローバル化による国民国家の動揺やその社会で発生している問題を説明する言説を単元の主題として選択している。そして、言説を言語と言語の使用法に区別し、歴史的認識を社会的認識へ再構築するという方法を獲得させている。このことから、本カリキュラムの内容選択原理は、グローバル化による国民国家の動揺やその社会で発生している問題を言説として構築する方法的認識形成に基づいている。また、カリキュラムは導入単位におけるグローバル化に直面する国家・社会を言説として読み解く本カリキュラム全体の視点の形成、主要単元1～3におけるグローバル化に直面する国民国家の動揺とその対応を言説として読み解く方法の獲得、終結単位におけるグローバル化した社会に対応する市民社会形成の方法の追求のように構成している。このことからカリキュラムの内容配列原理は、グローバル化による国民国家から市民社会へと移行するポスト国民国家論に基づくものになっている。

### 3. 成果と課題

次世代の生徒は、グローバル化した世界で生きることを要求されている。そのため、教育においては、世界に関する学びを拡張させ、グローバル人材として活躍できるように生徒を育成することが期待される。生徒は、グローバル化による国民国家の動揺やその社会

で発生する問題の認識を深め、国家や社会についての問題解決を主体的に思考し判断することが一層求められるだろう。そこで、本研究ではポスト国民国家へ移行する社会の認識を深めるための世界史カリキュラムの開発とその特色について論究した。

次世代の世界史カリキュラムは民族問題や宗教問題、労働問題などの現代社会が直面する社会問題をカリキュラム構成の原理とししない。なぜなら、直面する社会問題は予測不可能であり構築的であるため、特定の社会問題の原因や価値対立、解決方法などを学習しても社会問題の認識を深めることにならないからである。そこで、開発したカリキュラムは、グローバル化による国民国家の動揺やその社会で発生している問題を説明する言説を単元の主題として選択している。そして、グローバル化による国民国家の動揺やその社会で発生している問題を言説として認識する方法を構築する方法的認識形成を内容選択原理とする。また、グローバル化による国民国家から市民社会へと移行するポスト国民国家論を内容配列原理にしている。つまり、本カリキュラムの構成原理は、グローバル化による国民国家の動揺やその社会で発生している問題を説明する言説に基づくものになっている。この結果、教育内容はカリキュラムの構成原理に基づいて、開発者の主観により最適と考えられた社会問題を説明する言説を選択し構成される。つねに開発者・授業者が構築し直していくカリキュラムでもある。

本研究では、ポスト国民国家へ移行する社会を読み解く次世代のカリキュラムとして、言説を構成原理とする世界史カリキュラムの内容配列原理と内容配列原理を明らかにし、具体的なカリキュラムの概要を示すことが出来た。しかし、本カリキュラムの教育内容の編成原理までは踏み込むことができなかった。また、言説を構成原理とする地理歴史科の編成についても言及できなかった。今後は世界史カリキュラムの構成原理を精緻化するとともに、地理歴史科カリキュラムの編成原理にまで発展できるかどうか追究していきたい。

### 註

- 1) ウルリッヒ・ベックについての論考のために、ウルリッヒ・ベック、鈴木宗徳、伊藤美登里編『リスク化する社会』岩波書店 2011、などを参照した。
- 2) 池野範男研究者代表『現代民主主義社会の市民を育成する歴史授業の開発研究』（平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書）2004、などを参照されたい。
- 3) 導入単元の学習指導案と実践については、「社会形成をめざす世界史の導入単元の開発研究—単元『言

説「帝国」を考える』を通してー」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第115号2010,を参照されたい。

4) 単元1は,拙稿「世界史における現代世界形成原理の学習ー小単元「国民国家を考える」を事例にしてー」全国社会科教育学会『社会科研究』第59号2003,で論じた授業を,言説が認識できる授業へと発展させる。

5) 単元2は,拙稿「社会形成をめざす歴史授業における発問構成の研究ー世界史単元『宗教を考える』を事例にしてー」全国社会科教育学会『社会科研究』第72号2010,で論じた授業を,言説が認識できる授業へと発展させる。

6) 単元3は,拙稿「歴史を手段化する教材構成原理の究明ー世界史単元『工業化を考えるー福祉国家を視点にしてー』を事例にしてー」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第19号2007,で論じた授業を,言説が認識できる授業へと発展させる。

7) 終結単元は,拙稿「Ⅱ 生徒と共に創る世界史授業デザイン 11思考力・判断力・表現力をつける『地球世界の到来』授業モデル 戦争記念碑から戦争を考えよう【世界史B】」福井憲彦,田尻信壹編『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザインー思考力・判断力・表現力の育て方ー』明治図書2010,で論じた授業を,言説が認識できる授業へと発展させる。